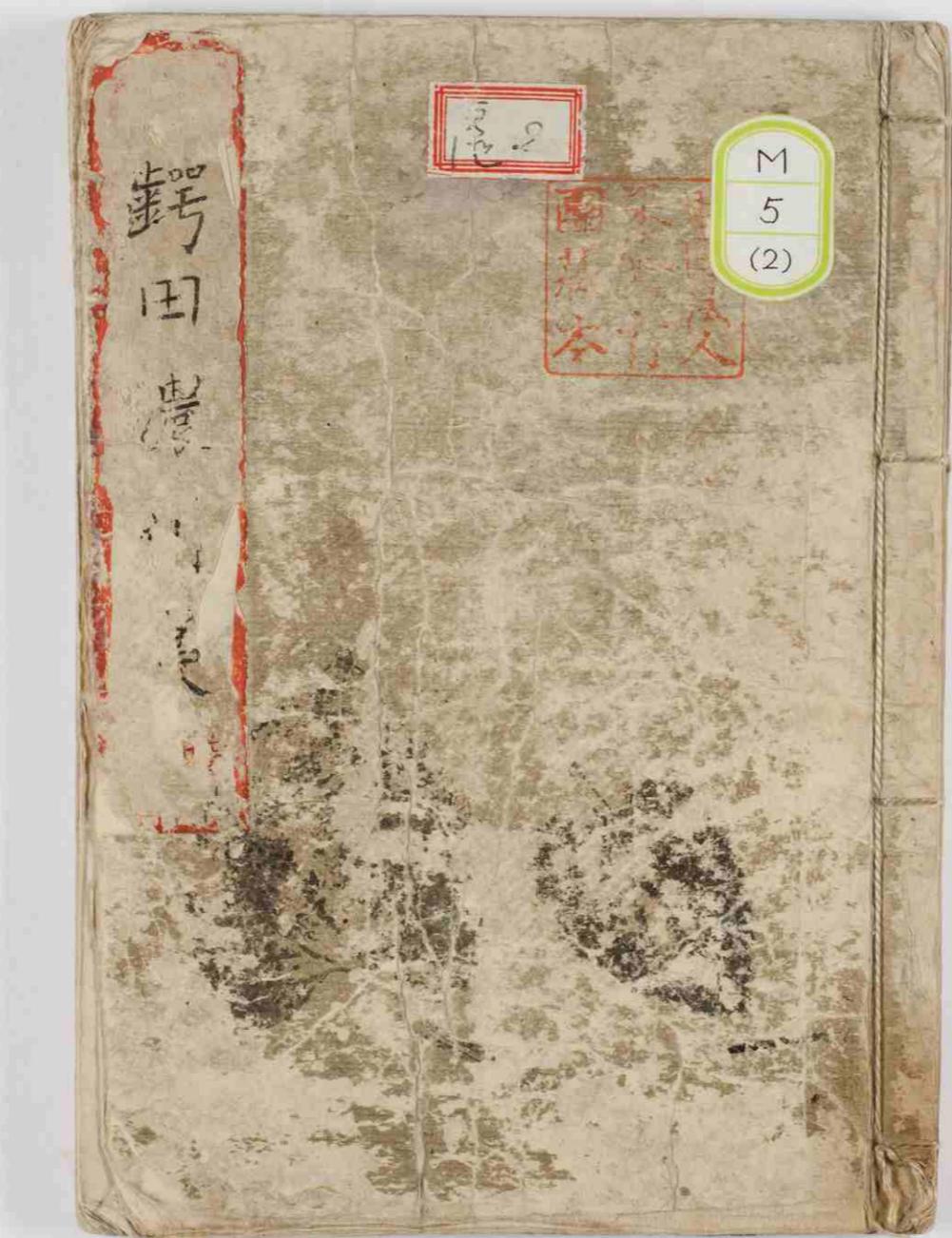
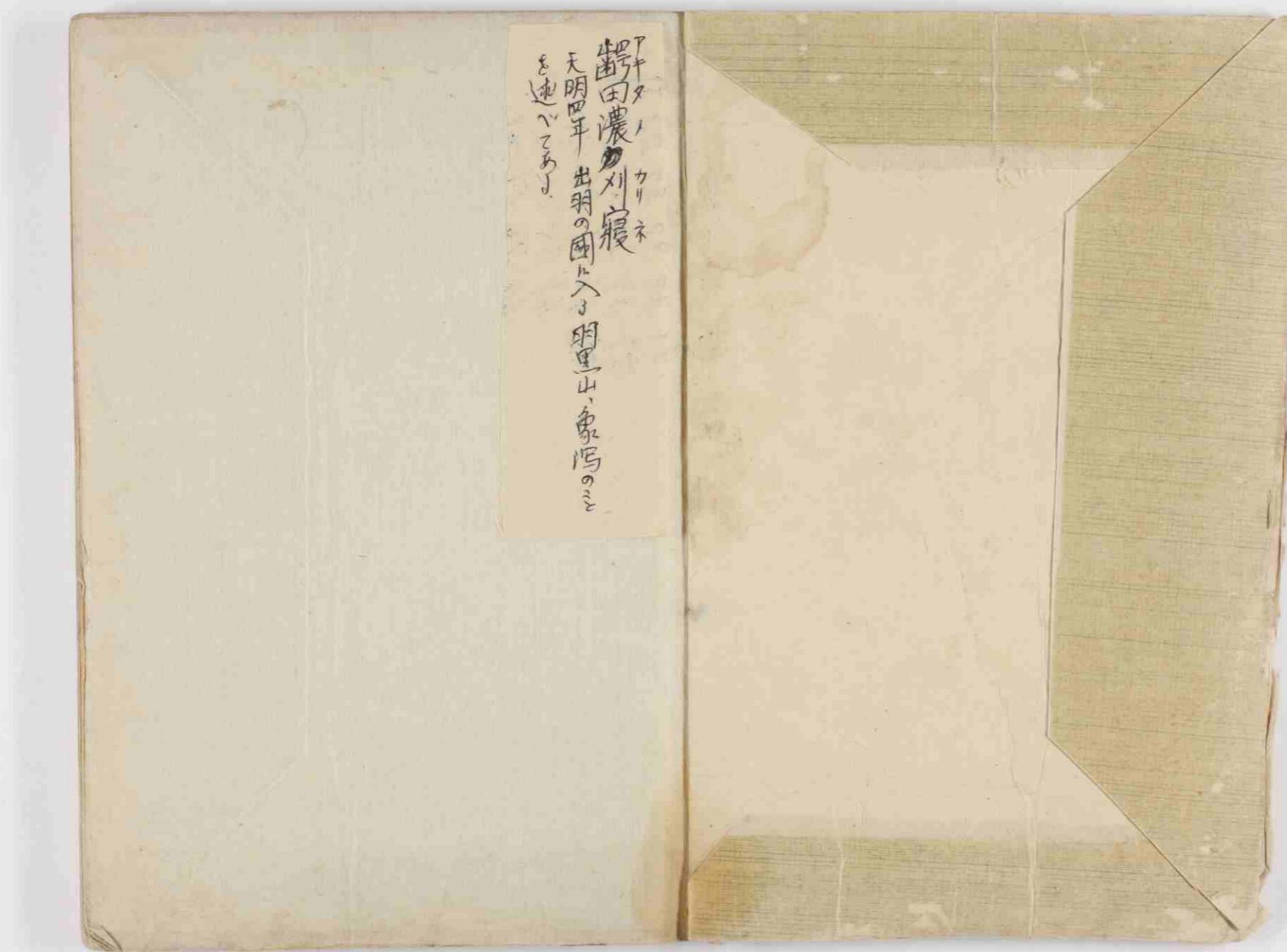


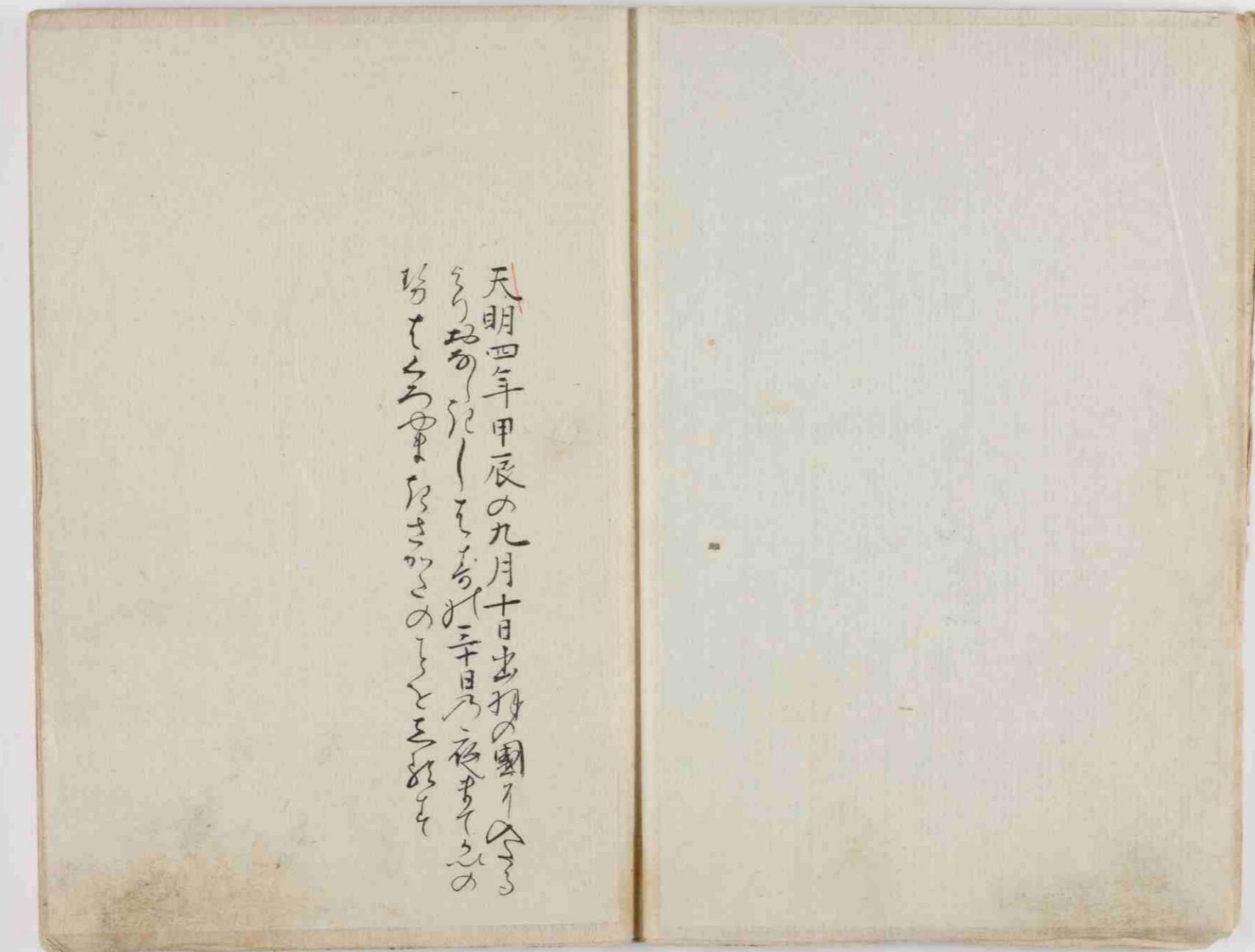
以下 汚れあり

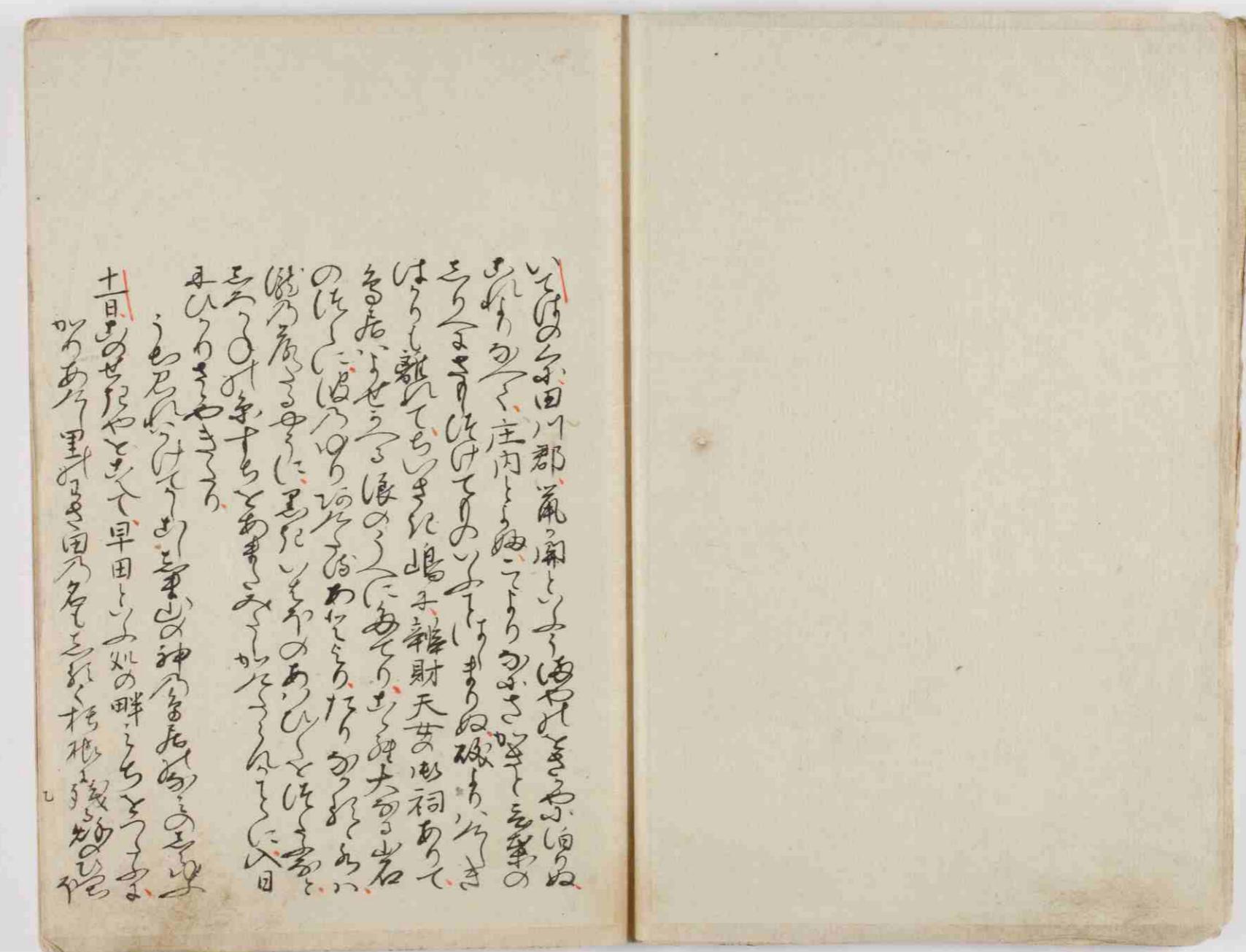
破損あり

1/42









老と小岩、本草学、西光寺女住持、天真土人成
立して今、其のものと云ふ事は、萬りを要
ひ、然るが、漢風より色うじ薬と呼んで、此
物あれど、實行の本

廿一日、西風もけへて破風のれとて、之日第一日とぞ
て、おまよをあゆむ。朝、寺にあひて、北風の
田^シ、唐石^{シト}を、人手^{シテ}もあらう。かくはうち
りのとくとくあとおのくもみやとのひをゆるよ
西^シにし、ひがみをかどとそくうとあふれをあ
十三日、東風もけんう。かく神^{シマ}ひじかくもあ

あらひにて此事が軒成つたりす文雪せよ
あらかず、ゆめほしや」と啼びぬるに君
竹にあきゆにて、まるはるあきゆにて、まくは
うらまくさむて、うらまくさむて、うらまくさ
く風の支ふの風をかねて、あらゆる風度のま
まゆるの風をかねて、うらまくさむて、あら
あらせよおとく。
又をひかえにて、軒成つまゆるとき
かねの上人代よと
従ふる處の唐角からまゆるとき
うらまくさむて、
筆あても墨と絵の名手歴多く、秋首と

音字をあらわす處々切通しを破りれ
の如ひ色くありて、とては、此の行き渡り
せす、北上へおもむく、又た波を存へん、とての日
の如しあすも、かうゆまらぬ人とかうぬゆまらとは、
北上へおもむれとて、

音字のまことらく、住吉坂とすら、金井坂の通り通
す、そよとつらて、趣す、此のうちもあくられ、
も、温海を、ほしの町を、よみうるを傳す
りて、みやじらうある、おひねのあざ堂を
まねく、もちくて、かくもすら掲げて、けり、あま
ぐれあるとあく、ませす、お城をあれどもとて、
萬葉の立石とて、たかさむ岩山の中にありす、

翁りあはる相手ね津すよはが、世中ゆりてとて、
りて、あせみのほなうとよ、やぬけとやんひて、
とて、ゆき絆のうぬもあと、破のじゆと詮あら
やくぬ、ぬくじたうと、えぐ、錦うきよけ
あふぬりりりんぬと、翁、鈴田をあらむる
と、世事や、いりほれと、此林のかうひとすりおと
かうりてりとやて、

休す鈴田の翁も鹿児も、底のひよす
游あらぬと例の不耕作とすむの五十年も前より、
格と廻りて、鳥谷坂のうとうあらわすもよ、よとま
やうとくのうと、あやからせりと、りのうくく、
ゆるおもひとて、やうぶとくうとすのと着て、

頭巾と、そろそろぬけめり、又半布とて、三尺余ある布と
地もあらず、ひざまけてしもと、眼のこもてありふる男
女、夏冬ともぬくし、かくせうけ、山もの山うどをもる、
さえの神の森とて、大あれ木の五尺はうなむ。此
おぼらめのうわす作りて、着うせひゆうだらうと
か諸の神のぞ、願うそじらく、事侍ぬ人々、
爐をす材をもて、此はゆめいもあやうるアモ
うゆみを、おれよきうる、^{レキ}（名位）作、
かに一夜叫び、坐て、いをあらじと、山もの
山のうと、兵士達の衣をぬぎ、すてにゆるれ共也
絶形、里子もよびて、遠若もうねうると、辛とぞ
あまりうきのれど、かの火のあよや、れぞりと

かう。此後紀の國略の如く文へへて、又其應事やあ
る事も、御子を刀通じよえり、破り山等の
よこわい火事の、早虫と呼ぶのとよりて、小觸了
食とせらひまで、意の後へて、あらゆる御事の發
信がうちとも、御子を考へて、多く小触の事もあ
ひゆきつれて、あらう、御子の事の如き。
とくに、わざある事からとつぬ、擇口と考へて、
廣くて、みちびくに、凡そく起りて、みのまゆりふえ
すもせれども、すの、若葉の葉を、さむら山を仰ぐ
の如きと、あつて、
わざねて、封の風を、まかんと、かくまひく
やうすちて、三浦のをもしてある。かく本明院を

子はそよやくぬるをあらひて、
ゆきのてみのおくに、のぞむ
あら御堂をとほくをゆり行ひ、
残行ひがんひの後、横二尺五寸
金色をあらう、正やうじのせん
日月天人を、
日月天人を、
としよけすすを、柄もとれ長刀あり、
單とうの持うちねど、
かくらひて、

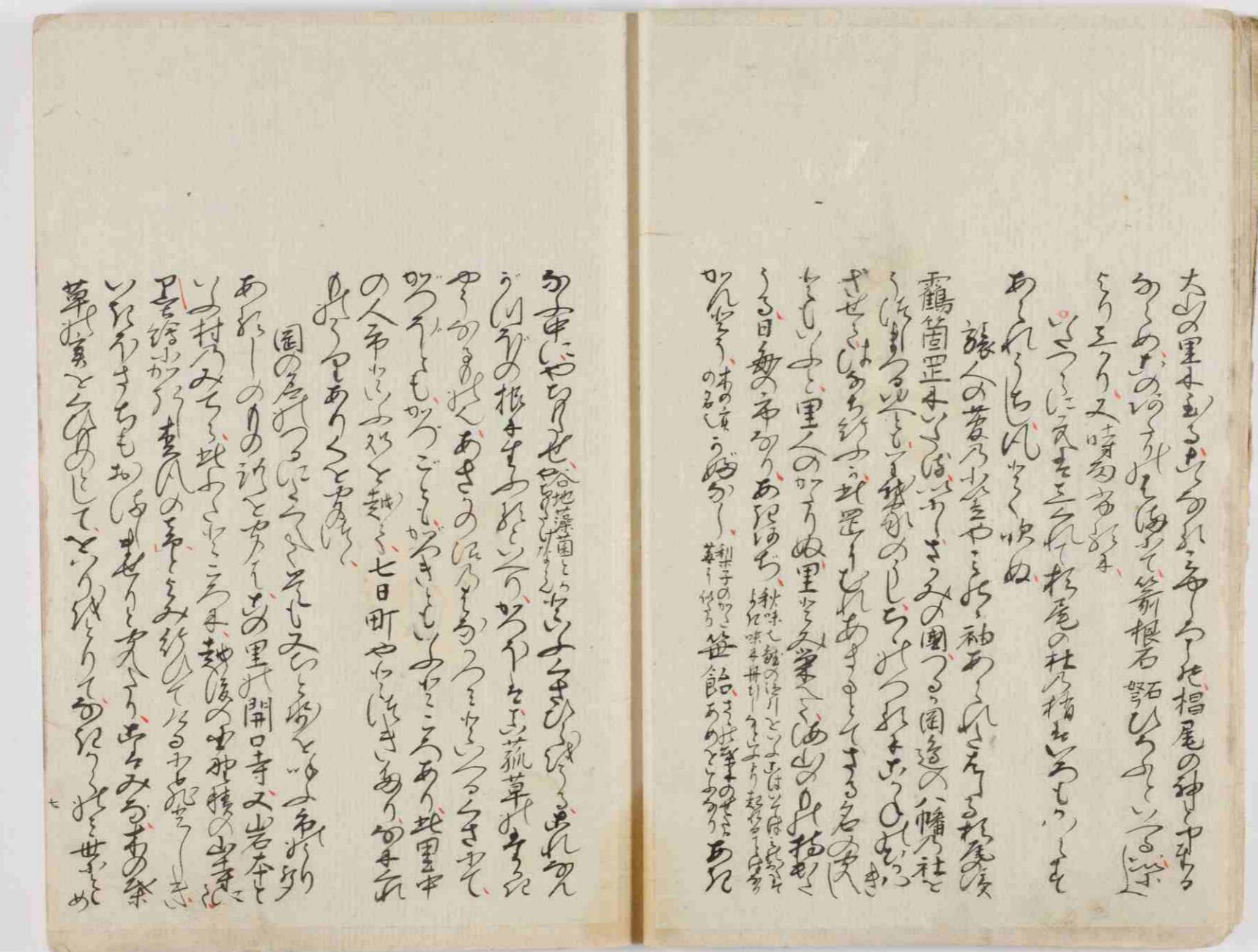
十首ほどの中山とふだと等と矢引とよ山陽路
ゆれりて、旅ひうあはせりのうちひよすくとく、
ねうるねうる猫のねうるとうれて、うるわひよき

まのあくじ道をうつて、ゆきのあくじをうけ
例の戯れ物と

あはれのせせらぎよしむかがれにのとさみ
とあはれ、濱風しまやくしぬ斜うり、うめのうみあれ
なみと、進む日めどもとよみて、海をうち入るすまう
ひのとほのゆうじけうきのえがくあはれ向れて、お
見ておひのひ、又山かくう樵木いまととて、あずき山に
ちくわくあとちくめゆうく、まきうちすきて、蛇くみ
あひゆゑさせられて、草と木と里むれうゆく裏が
車とせたぬ神玉西のよし旅のうちくまき
多く片貝のよひにまとうあく下ひ枝玉葉上の

第二章の本から本筋を引いて

十九日
夜半中せんとてやまと祝してあわぬ元旦
となりこれかとぞと。此事或はんとすれど
いづくらにぬがすまやかのとくあつ日加賀
とよみの中央、すりほじ角けはゆづらう。
云々お侍りにそれあらわらも紙折て今をま
せきめうちてひでけは坐すとあらわる。お
うえのとくとく、おうりて、あつてあらわ
せ、月見とてほめひきむりのいふをかせ



そぞく多くあらと弘智大寺といひますありて
又ちに里のものひし四寸のものとしゆす
路とさうと一町あつたと里あり。山からに通す
奥れどもよきとすの過をはりへりとて山谷
の筋をまよひて山縦引け、落つてかわの通てて、
山賊ら輩はまよひとくゆめをかへりてかく
ゆのれとくわたりてそくにみわのるを
えくはくまくはくまくはくまくはくまく
やくわくわくわくわくわくわくわく
二十日、えふやうし日ねる山本西うなまくやく
やく、梵字川へ車とほす北の峯をほ山の雪晴
か湯殿山のとすとすとす赤いとす母をぼり

三橋せふとこうに車とく、三と二海ようちよじまと

ゆくとく

の駒の馬をする三浦の船を下りてかく
まうむ村、荒川、神路箇坂とくとく向井町とよ
いひぬ中坂、赤坂、念佛堂かむすくのくわく墳
石本、高原奉にて、元應二年とくとくうじう
かれのとくとくあらぬ、日町をあらむれま
滑川とくとくのくら流とくみそくひらじやまね
聖本あらぬとよ高れとくとく、まく百日指
まくじゆのに帶もくすくとくあらぬて、陰夜の
育やかまうとくわくわくありむにまくとくて、多
くはくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

そり、御神馬それこそまへるておもむけりてと
そばをひだりて、是年ははうかたて、うやうめく
山はるどもすもあくへん此の年もとく、事事よ
多く、あくと少くやぬきりがひもとく、此達
大僧正行尊のゆゑありまうしで、此をもととく、
やうそとれとつてともとしむる多すもとく、ゆく
輦車もくもせやすひよちされううきくとく行尊大
徳桃の實をもとて水よりひく加持し、今じのまを
行つて、もあてまきうちあらうてしきりとす後
傳し、桃清水とぞいひかれす、ひきほめに北山を
さうとうり行つてやうそ、千塚いろこもとみと路
がくの本をつね。

禁句と花火の事は筆致でもありやあひとて御見
あひ物に絵ひて、と國のことを、と花火を絵ひ
やあく二王門をぬき子供とよどもうす、と
縁子するところ下居宮、園加井、後川とらう
ゆれ、岩のこす、俱利伽羅不動尊の寺せ所書
事す寺す書放第す中から、前説うるが、錦にて
うはまづらておとし、北水ナロホリ、
うだつてめりとほひ、軍荼子とお嵩君を
松のむらを中して五重の浮圖あり、軍荼利明王、
妙見やまく等、と、永平院比、平將門の建築
ある文の段ノ左よ石づ、燈明石とひく夜御大
あらわせすとひ、又水をして山せて、りんごりん

あそでやあらましは早とわよみの二石と金に
とくみるむつもじはうひはうほ、おゆううちとく
ゆるの楊も珍るかみの葉、二の坂とす。おと
よきくく鶴の松、伊弉諾山若一王寺をゆき、伊
弢諾伊弉冊の二ちく御乃尊をあらゆる。
坐於石とて、大かきものとくびりあつて、あま
きの様ありて、とくねりとよろとるうそうと
く、西行房とて、こあら、下してうりとら事行し
すんと、あまの森り冬とて、兒堂とゆう、坐考
のおく信夫郡、高崎庄とれど、その子、高ま丸と母
とれて、お物を山ませりて、すけせんとて、あじと
あらえうら世ふうきよくわくわく、あまの

僧侶無しをすのである、おとづれとて、野、わざ
かけれをすとあまのひうづく、もよだ子
ともかくがね、其あらぬ堂とて、あとくゆ
きひつて、又刀笠及搜とあまひぬき酒、母、持
られと作りとくのやうぬやすりえとゆかて、是
よりおれ、玉依姫伯爵姓、玉依姫御子也稻倉魂神、倉
稻魂神ありともやうる、又稻倉魂神、倉とく
世、羽黒權現、權現と唱へしも、秋月の山と月讀尊をあ
まり坐り湯殿山あらうする、大山祇命、又大己
貴命、五角を彦大、出見尊とも、宍方、あ、牛の金
からく、遠きのあらじい、ひが浦、かじ、出よばせ
召す、おもなむおとすのうとくいと、金主鬼

なをあらゆれり、山の巖にひびかせたる
 り、身を三、金剛とすら、憲の山とすら、成
 してよしとく。
 あり、無事とあらゆる心のうちのものが、
 月の山や雪の山や、
 ひもね付くと月の心をとれど、お出で
 あり、念佛車を、柱を、もくじゆとひかる
 車ひらきうちめくしるど、まちめくらん、日とく
 眼と、ともわせ、わざわざ、めぐらめぐらうと、福が、
 うもうりとも山鬼おし、狼と、山鬼と、山鬼と、
 黒の山鬼や、いのしと、岩つて、いのしと、
 あらがみのねと、うつむけと、じこくと、あらがみと、

ねくやぬ萬の里のもくと、見る相思企は
 来聖の二人あわせと、ほんと、と見て、とさき橋本
 金剛杖をつけて、うゆく、志羅あまこと、うひく、
 具ちれ、れもかして、天宿別當の蔓茶羅を
 つけ、ゆく、念佛杖と、石橋をねりりう、
 えれりく、文殊坊をやひ、あがく、くまく、
 ら、かまく、をせひ、一夜と、あり、と、残り、短
 冊、追ひ、うせうと、かうね、お山おもて寶
 とはむく、世中のさうかりけ、じもくは、難度
 うす、政所坊や、おりうああうかうへと、ゆり
 ゆり、もく、訪ひ、あく、や、急き、あく、あく、ゆり
 ゆり、其と、おれ、後二つあうと、手すりある

かと東北の糟鍋を手取つてゐるもあらうと、又
このばかりあらん黒川色がうじ月のうめが
ちやうどまづかう音はめでうとゆる。

廿日、あさく山奥のうちとれて山谷の藤をすり、
而後三ノ段へ下りてす。

すく先に岩船の跡をともなふる瀬川、
瀬川、三浦、漆津、山崎、芦河、久良岐をうと
ゑあれ、阿古谷稻荷を、華表にそびひたる前木
ぬくくあり、神社の神がくわゆもあるとひそひ
てこうてせみだれやしきみたれあり、石柱を倒
す、おもみちのゆくやく、おもむねしをゆうぬ
をのましゆまじりてうぶと本音とじてゆる

ひそ山をすまうぬらまく川を廻る、そや霜
のありぬ、シカの神をそわづけむとひそひ
年、鳥あざてまく壁を、おとづれあくとひそひ
而後ひそまく峰高井伊のほかくと御山
古松色、ままで村のぬ、此里がしうる泥と古門を
ひそむ（寂上川）にあつてとおのづの金目の
黒れあすくうねるゆきれうち過すひそひ
てみ小舟ありくい海ぬうりくとよひそひ
舟やがく成ひそひ。

廿二日とあく、新堀をくとこをう、ああいあくと
すそ、寂上川のまくにありて、おとづれとおとづれと
して、まく車をすまく金と玉とくとおとづれとおとづれと

黒の子のうり酒田のやにひく吹浦の瀬之内料手
せあひやうてり 神の御のほひをめいはまの上
そて清き御のとくまく 宮の御のとくまく おお
おおまくまくして 神の御とくまくせんめい
うひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

旅宿の間の油の漏もせやうに余
恐子の漏もくぬとみゆひ、洞院榜政より
左とくせ新續古今事中しゆへゆひ、またと
かひあら北のあらもとゆひあらゆひ
きてゆくよ路のよにゆくたれそよ
あらゆくよ五色れ段のみくわづけのまよ

争ひぬ事、長著をうけりまづ神あらそ
との事よりて村上はちくに於て、阿良太女

廿三日酉未ぬれて、新田目をもよみて、寺のひつねをう。

廿三日あすめにて、新田目とおもひて、せりひてはる。
そひの夜、月はう袖をつかぬまむらに、あくまでお見
ゆき多く、十日町とよ村とくれど、そらせきとて、萬葉を
うせと、あすめにて、ほみうくいぬ草雷盆ますり
くすりて、半身まで、かづくと、そらせきとて、せき
やうすきとくらぬ尾落伏色かる、歎龍山永泉寺ま
ゆ寺乃れとぞ、此とてあがてみく、ちつててゆる去
とぞれ、出羽國庄内飽海郡大泉庄遊左郷尾
落伏村のうお寺と、人皇四十八代天武天皇御宇

あれかのとてあくまで毒蛇が二つも
て頭を鳥あら頂たり、尾のつまむとにあ
きらはれてる時、劍龍山とひきやうと尾ち
ゆ色とす又蛇財石とよ岩あり、所謂いう先
は文和のうちひ本源道也と子律師住むひて
六百九十五年ばかりぬかくて、台蜜の兩宗と二流
とひそ一、又能登の國、物持寺の城山禪師の嫡嗣
玄翁禪師、世中は多ある知識とめ竹と、毛と
魚ねり此寺をもじりて、北律師も之竹と、
のをこなめて、北アーテキスとよすとこめて、アーテキと
玄翁禪師ゆづりて、あくびと頬のうちひ律
作焉ゆづりて、曹洞宗かられり、玄翁禪師水の

邊小野をみて、あすかとより、ひよみが絞すら水鑑
御影をもと高くすらなると、やほりかあけてねむた、
そのあ、鳥羽帝とおどりをひひ、下野國、素須鷦
原ば石をもとえとしぬ禽、つもとを了獸、千石筆舞
あすてされどとゆめりて死し、せりのてうち
名ニシテは、人皇百一代をあくまも、後小松院の少時、
明徳二年、庚午春、あくまう、物持寺のあらもの、石モ
魂モあくひそだうとむづひあじくまつ太徹禪師と
いりあゆま、ゆの井井す家、えのと骨雪せりまよ
あくま、あくま、追つ近ひて、祖多石の面小汗し、あくま
名をさして玄翁禪師、病ありて、奈須乃出ゆ
りて、あくま、あくま、ひて云、汝元來石頭、

謂喚殺生石靈從何來受業報如是哉去去自
今以後稱彌佛生真如全體とひて柱杖の石等
りも三ひ捨て會取せをもあどらまて此石
ゆゑよおれどもあら三事あれらりぬうゆゑ
ひのとニテアラ世中して石れどもの石わうけ
此禪師十と多トかくは也石の先後少松
院宣室行ひて太寂法王能照禪師と申す能照
禪師應永三年丙子正月七日遷化沙門也
七十二年遺偈云冥假合七十二年末后端的
踏翻鐵船を文にあま山内十景とある
斷巖古木池橋新月南瀧遊魚西溪鳴鳥
東嶺松風北林竹雨洞岸冷水谷口石鼓

寶殿紫雲冉山暮煙あら山の出で七不思儀と
いふ一不開山禪師木像帳乃もす在て山も
のう竹ノ二木は鎮守明神もとて祀る有りて、うけの
きもとせり三は寺寺主も引受けぬ、女遁夜すが
をあれやうじゆく四はもとめのやこう火をり
山とももあらまめやうこれ見る五は天狗山
とすて甚しきとあらうぬ、ホ、池の轟打か、二
開山禪師ひきまく、ひきまく、池の轟打か、二
とあらん、七は遙金音ふくえしてもるる山もと
みけのとくとし、をれましめをす、寺守の
ゆゑひきとくとし、をれましめをす、寺守の
ゆゑひきとくとし、をれましめをす、寺守の

鷹のこゑかは古牡丹を胡蝶のほに繪うる所
葉のうじのふを玉藻前へ調度つてせまむ
うも復ぬ吉翁福師本釣りしものあらん
苗ゑあれをあれのよきを取れどもとく
せちしづねとも湯あめの氣と大謹を
神の御よしらして岡山福師の山林と
まほもとくゆみひ香爐あとあやめすむ
もくわんむくとすと一あととしまとく
のあまのひりてお林なりとそくとわらひと
せぬきてせぬ吉翁せのみうちとまとく
せありはけてとみちあがめのよくすみてけれ
眠藏とむてな壁火とて夜ひとすがりと
す

廿音劍龍山とすととほのひよし吹浦より故や
つねのゆひとくうけとくすく
あらゆきはれもくはくはくをひくを
山の蘭風のとく風うりていぢせひすあくあ
旅と通す奈良崎のはま游浦をあゆまくせん乃
開ありてせまそれわすぬ檜の木ひとくち
岩浦よりとく風あくひとく風うりて三崎波よ
慈覺大師の御堂ひとくひとくひとくひとく
子ひあじまこみをとくあうてとく風うりて三崎波よ
うくすくの御堂ひとくひとくひとくひとく
のひとくひとくひとくひとくひとくひとくひとく
ひとくひとくひとくひとくひとくひとくひとく

やくめて今、世事をうけりのうへとがくは（傳）
 坡の半とすれ、慈愛大士は御豆の江とて石の手とよ
 蓮れひるがてじりとり（ゆひまとて通りぬ葉とて
 山ももあく、是ゞ（そぞ）うむを西ゆるをてらむに
 今まとぞれ、菖蒲の實に付くまへまもじり
 歯の革をうやで、布路よりゆるゆきを蒲萄（ぶどう）
 人れぬをうつて小佐川（おさかわ）とて破部（はくべ）と
 そまのえきうてねを、豆（まめ）ゆけり聲（こゑ）を
 けぬされやむけとて、誰（だれ）も入くるをかづの
 煙草（たばこ）をこみ、氣（き）てもせきをまつてそは
 まほどのそくとくにてぬきぬ、生（なま）むわとて
 われぬ越（こし）くふくめられやうくれう、あきら

や半身の室（むろ）に坐（すわ）ひて、庄内（しょうない）からおうやまとよ
 もおねじら（おねじら）しておきれありとてつる舟（ふね）とてろ
 ののあそそがから、うみみうとうゆ（うゆ）あゆり
 とあらねんとし（とし）おおせしはま（ま）せんわと、お
 やの庵（あん）とゆて、おゆき（おゆき）かれとゆかのよすとま
 頻（ひん）りうぬ（うぬ）くよにぬ（よにぬ）やまととゆのゆ（ゆ）と
 名（めい）めう（めう）とゆづね（とゆづね）むれ（むれ）し（し）ありく（く）も
 とし（とし）そ（そ）ううびよ（うびよ）ま（ま）ね（ね）と（と）せ（せ）北村（きたむら）
 昔（むか）ひ波風（はふう）とけく海（うみ）あ（あ）く、舟（ふね）を（を）ぬ（ぬ）く、
 箕（みの）石（いし）を（を）あ（あ）ゆ（ゆ）中（なか）の鹿鳴村（かめいむら）を（を）あ（あ）ゆ（ゆ）く、
 巍（とき）の山（さん）じ（じ）に（に）や（や）うあ（あ）ゆ（ゆ）く、基（き）輪（りん）を（を）作（つく）だ（だ）

おも夏の匂ひは、そのひてれもとくあへく傳ひ、私
も軽煙やうす夢を印ひし、かうる頃ハツセをう
きしもるしまさあうさんと、ひそめくおせんをひ
をまきなせるせんとたまし、あそそくひがうひあみ
ゆきあそしかと、すらりとひめいとひあらへて
ゆき、せんをもすすみけると、よほぬゆにゆるたう
也。あ(遠)とひうひうむかにゆく、山ちねびみゆ
ぬくうれ風をかく、浦西やう、四もせえよぞ葉も
あれとありて、舟とあゆうよかり、せりて、二日三日
うなづけし、ふうあれと、そあどりて、あそ、のゆ
れあん、うのゆひと、うれ、無事く、まことに神と
うそつうお祭りみふうで、ぐず元とて、岩ふう身

あはるに、うき波のものと、其事にて、せゆくと、
あらわし、おして、今。
廿日、ぬ雪うち、吹ふ、大ひれとて、おほひも越てれ、
川袋をす、も魚等、用材をもぬ、此聞じて、も、
のうりとて、せむの、あとあ、三崎守地獄谷越
え、のひあらまうと、う、小河やう、波え、お
方、國あり、少松も、いと、もす、おこすうに、お
と、鳥耶社も、す、も、あと、とも、うきのうやも、や、用
ひ、かん、せむ、う、も、浦よ、く、ま、浦は、ひ
み、う、り、れ、も、世、本も、うきの、浦、う、浦は、ひ
れ、も、う、り、れ、も、世、本も、うきの、浦、う、浦は、ひ
れ、も、う、り、れ、も、世、本も、うきの、浦、う、浦は、ひ

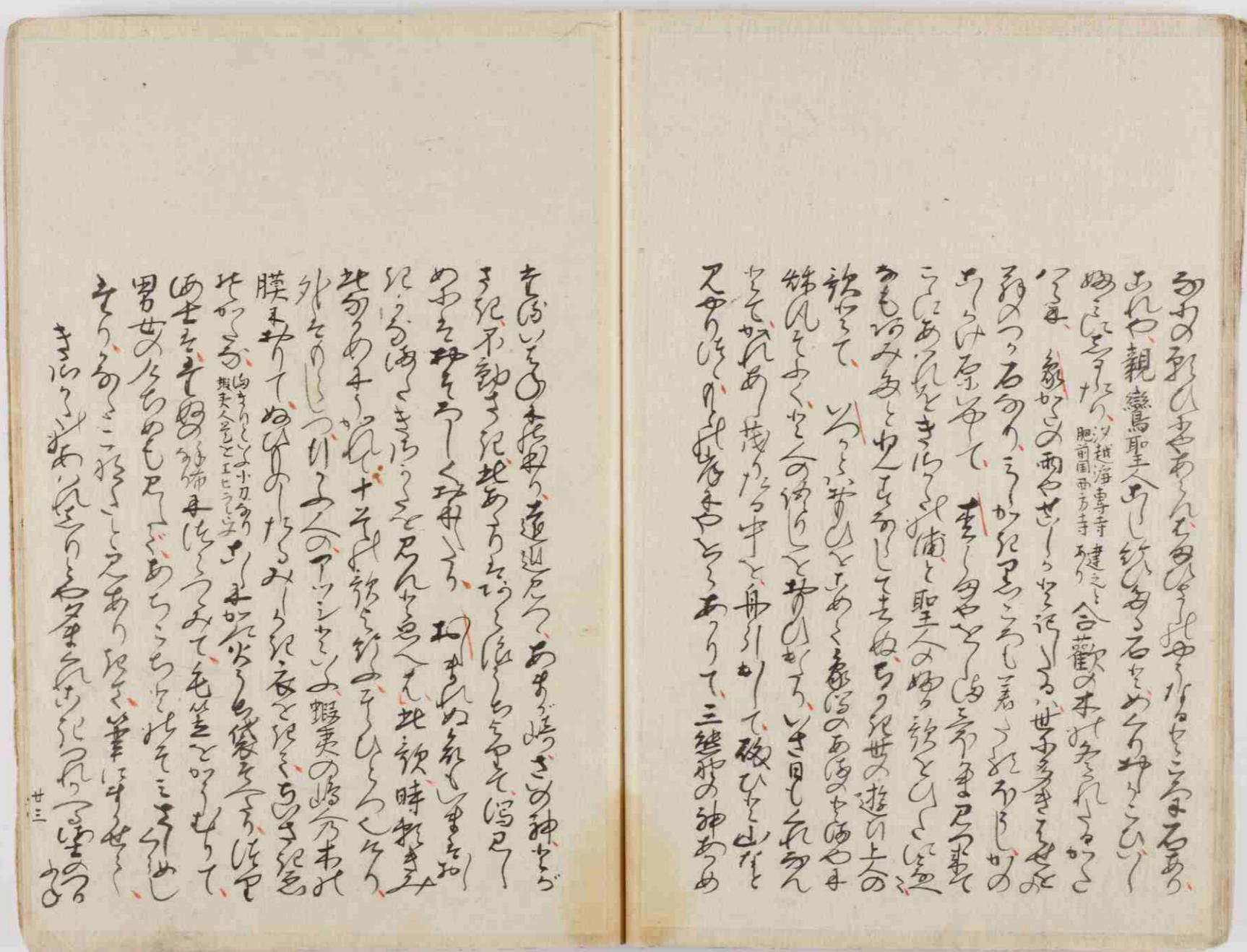
由利郡千満珠寺の西の山袖を走る
ほどの風の音さうくあつて、又晴れてありて、
あらかじめからて、極めて多くすて渡り、
そのとくあらかじめ、とく度の多め指の巻
あらかじめ増り、ひよするあ生、棹もこえて舟
もくつてあけりかと、もともとあれも、
のあをかはせ、まく掛写の聲のあはせ、
又あを取て、あれもある破れがこれ新小もろとも、
きの表ぬれるもと、おほのあら葉に笠帽子
あらまかの錦びあれと、えうらかみて、おまと
やうりきて、

前記の事より、五年後も此宿場である。甚矣其
多也。宿中記す。男と女とがひきあひて、テラミ
をうながす。宿は小屋で、火をあかす。お宿はお城
筋の事で、あつたひりまき。
廿九日、あらそりと、さくやうて、宿を出る。まじめ
であつたせ、盡とうて、走のあはせがきて、あるの鐵子、
ひきせうし、お城筋のつんく、まじめのひの、後後
えりを呼んであり、そと、おもむきもりとしひも、あぐ
まよひと夜もあり、あらそり打籠人の集ひ
ひきうちせり。古城筋の、いわゆる、宿中橋と子川
橋と、小舟とせて、妙見嶋、と名せしに、のりを、
橋を下りて、入を島のなかへ、りつて、足をも、おま

袖とかけらを舟とさせ、おまもととゆて三
三多りと、すま、高き頭と、お詫く今、やうてせん
舟を、まみだりうて、玉簾ひきかへる。
椎島、すゞし、ゆゆまとおれひきくおせむ登戸
を、吉瀬まとゆく。故舟の邊つにやうくえり
あらぬ、とわうけ、ひくとゆくとよひ、おひに
えりに大始めとしま、ねのゆくとゆくや、
とほりあが車を、ゆく。ゆくは萬代あひじる
ゆき車をそとめ、蛭子島、おののあけ、船の
備えとく。まもとひもとをとけて、岩だらけ
あらひうけと、そつて、

中身の本物のもので、本物の本を書いた本の本

島嶋天神嶋大森うとだすりた御端指れらる田神
の杜うり守夜神とすりとまつる。多き寫の夢を因面
烟少て煙を云ふありたがをりて。舟くは
あはれくもあはれくもあはれくもとせんて。野うかひよしむ
ちづきうつゆと多きとまくめくもれあはれ
小舟うり出に多くいはまほくもるのね、じうの
浦うるとゆくの、大湖越うみの八幡の社うみの
石うみの、あはれ中手、あはれき、悔ひひうつたる、うみ山
の神とすり神の社、蚌満寺、蛸とと見多き以てくわき
神功皇后ゆめうとしきうとひうとくらの西手舟、うきとくらの
むくぬ西行上の、湯本船で、おもひ橋をかのく
ねうわう、うわうのうくわう北東とし紙ひきむくらる、



ちゆともとひゆに餅ほのあれをもとたれのえ
旅衣わたりてしるふ湯のめにきよすむお
のゆの鳥をタモリのくわづけにまわす
をゆす舟のり梓の鳥をもとてゆくのゆの
ゆの神をむきよみを嚴徳をすくすくもよき
ゆすすすそ通かねむらもくはゆかくは
まことうちもひあせくじくとくわぬもよき
けいを置ひまゆゑとくわくうすくとくう
地蔵のあらぬをもとてゆくゆくもとくわく
ゆくゆくもとく
かま遠くわざりきはやしゆゆくとくわく
かまうすくわざりきはやしゆゆくとくわく

三十日未明、おひだは越の村をもぐれとすみにあ
る。おひだはおひだの三日後、ひじとひじをもぐ
れとすみにて、根ともさびと附すうて沖のものがぬ駆除
はゆきと見るに、金浦少しご破やどよしと、荷田の
つるむりう、あらわだとよののかり根をもぐれとす
みをかあるて、ゆううれいうううううううううううう
あさくれしめす固可也と、もむかへく、強金
もむかし野すとらすとくりやくしとくとくとくとく
今方よりうゆめやうううと、ゆううううううううう
やくわくすとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

之の路にてかくのまゝに於此のひりま
あらわす所をして、よどらしくて、これ
れ宿のうちゆゑと、ぬけとせざりをして、たまはげ
れとせざりと、みひひと、くじて、のむるが、
まことかとて、大のうりありは、りもを、
うけたれ、少くわざひうそせり、れやひくつ
あめと、本庄と、少里を、のめ、おひと、あ
きまし、せりひきとくらして、しまあ
黒、(名)と、うり、うれのせり、うめり
く、あ、袖のぬれを、見て、ゆかず、すと、
やく、ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、

まくあさつひきとてはのうすとくの神

廿九

二日未だ未雨、水のみ冰のれと、立あつてかまひ宿る
事あるんをうきぬれあらんぢらをとお
うのやま休ふ哉里うち、汝越ゆく、少とすれ
いそらうとしと、君の旅はむわらて、本社は無事
ハ町と一里半アテナニ里ほどもとの宿をとど、よりも近いゆく
あらむ宿をとど、そのとどをとどをあらむ。

草木の生むる處を尋ねて、
 まつりてそひを詠す。移をよそひて、
 又わが人年達は序、五箇とひやうとまつて、
 のうをよひのくとひやうひとも、とだひゆい。
 象馬をやくと、十八四十九森と云ふの
 紹介てもそれほどよまざら、
 道里五六十里、山野あつたる處をゆき、
 おぬして舟わざみの、休見村を有る。じめ
 やまくと、山々、山々、湖をもよあの邊と角す
 うて、筈(くず)せうなまく、是とほりひととて、
 五箇とせりてすりあへ、ス若うと、あそひをそ
 うすせり、此のまちの物のをもひに、今に生

草木の生むる處を尋ねて、
 まつりてそひを詠す。移をよそひて、
 又わが人年達は序、五箇とひやうとまつて、
 のうをよひのくとひやうひとも、とだひゆい。
 象馬をやくと、十八四十九森と云ふの
 紹介てもそれほどよまざら、
 道里五六十里、山野あつたる處をゆき、
 おぬして舟わざみの、休見村を有る。じめ
 やまくと、山々、山々、湖をもよあの邊と角す
 うて、筈(くず)せうなまく、是とほりひととて、
 五箇とせりてすりあへ、ス若うと、あそひをそ
 うすせり、此のまちの物のをもひに、今に生

サセ

あひのよひと、草木をうかべて、草木には
 あまくとひやうとひやう。
 又わが人年達は序、五箇とひやうとまつて、
 七日とて裏あれんとひやうとひやうとひやうと
 うて、草木をうかべて、草木をうかべて、
 うすとひやうとひやうとひやうとひやうとひやうと
 うすとひやうとひやうとひやうとひやうとひやうと
 うすとひやうとひやうとひやうとひやうとひやうと

九日とて裏あれんとひやうとひやうとひやうと
 うすとひやうとひやうとひやうとひやうとひやうと

雪の山をよし

十日も雪きやうもすまゆのおりて、ひづれを雪
かう鉢とお舟と、橋とくとあと左近をあそぶ
雪のまづりて、日はるは半色のとだきに
ゆきやうく谷川のまづりて、あそびて
やうしてわうぬすむじゆと、さきもあ
やうほやうゆと、すやすやうと、さきもあ
ち、やうて、うきあひのせぬよ、やう
きあひとせぬとせぬと、あそびてせぬと
やうねんたまくまく、葉がうめりあそび
河がうめく、雪のゆひて、まくまく、やう
くまく、それこれと、妙のうじよ、まくまく

男二三日うちても、城あらふほとうもくめのまく
西ひいてゆひあらまをすくうひね雪せぬ
ゆれりて、ゆのとまひひく、まく雪せぬたる
上と松葉やくとも山賊ふすて、みふくうの袋
かみて侍の秋田の箱とくうめてこまくせり、
軍本ほそて、まくせりよおこまくとくあく
えふくれ、まくしりうとくあくこころくよ
ゆくまくまくまく、總もくれうみくわ
わくまくまくまくとくる、谷をこまく
ゆくあけ、雪せりよしきりて、まくせり
りやくまくまくまくとく、ゆくはまく、雪の
ゆくまくまくまくとく、まくまくまく

貢あす一過で田をさむれぬをみた
 りのそらうよとてはく無事とがつて
 三里のにし、とかくひのとも雪跡
 にして、あじひとよあの三つの材を賣
 りをしぬの事、いそとく、まく、垂木の
 つるぎと、夕月の影をあたはせうとさ
 れてゐる、
 又れどももぐもつゝ種がいわゆる
 土日ともいひも、吾の強きて、もろ
 雄勝郡西馬音内の庄、うちある三里にて、
 二日、雪やありそれえ山で、雪や、
 三日、雪やあまねり、晴れを薄のを、
 乃れのものも、つゝ種がいわゆる、
 雄勝郡西馬音内の庄、うちある三里にて、
 二日、雪やありそれえ山で、雪や、
 三日、雪やあまねり、晴れを薄のを、

あら、かまくあはれを抱の上り、舗の頭ひき
 ぬをみて、蓑の袖引ひだをあはれせらるて、
 せん、とせんぬをくみのり、ひいてせん、
 が、あこへぬくと、かまくひき、ひき、
 とひだと、す貨のをとて、ひまくと、西馬音内
 のまみう、北伐、錢子を、ちくとせんや、方舟もる、
 せひう、うれあらじと、せん、強きとせん、ひま
 くまくじ、日は、とすゆう、川吹わちて、重
 みをかくゆりぬて、ときて、くらて、やあれ、
 いざりて、寄くねて、とくねくこうじて、ゆく、ゆく
 あら、と、裏から、若人、葉のまつねのまつね、
 せん、と、うやうやして、ゆく、ゆく、風あく、ゆく

せりてやのうじてのくらまのむすび起る
そめせんとくよがせんゆみのきまとてのく
きる女あきれて、旦の見せまをかくわくとわくあ
あくともよこうとくわくとくわくあ
昔日風雪ありて雪あらゆれひうち雪に落
かくは紙の壁つまむかくまゆの手を
もはねあたまの雪、ねねりあらし月夜
此音四音の有りてけるに君やうゆゆく
えりててもうみゆくはちよつと人材あさく、雪像
えりくつともすすと、人面化うて、そがて
足さへたまは寝あらうて、雪立つてありき
也、こまきあらむ虚きよと、身向ふと、まくはまくと、ひ捨て

やうで、やうておまめらう御の後とまへるを
後からたゞゆきがれかくあ波鼻ぬ」ぬアサ
あぬはあうとあうとあうとあうとあうと
西子のとせ君もあうもしりじもくうせきと
ちくゆよ、葉こぼはうとあうとあうとあう
葉をおまえとあうとあうとあうとあうと
おまえとあうとあうとあうとあうとあうと
十九日、早と申ねまし、やう起ひよとあ
物を引取ふとおもひとおもひとおもひと
せうちのうこうを御してたるもあひとあ
ひとあひとあひとあひとあひとあひとあ
ひとあひとあひとあひとあひとあひとあ

物の宮也。又や三輪山也。三輪の神を守り生む也。
雨と霧と雪と朝靄と、また妙ねじき、雲の霞
も北嶺神也。又や阿多の國、三輪神也。此神
はいはう行ふかとわれと波よう。すがる、すげや。栗
原郡大日山嶽の上に祀る。又し、戈宮四座唐云六千丈
神經津主
神武、瓊杵、三神也。一社在於羽州駒形莊杉宮村吉云三輪所祭
神一坐、三輪大明神同體也。謂之杉宮大神宮。殿
猶存有祭日別當三坐。すとあら、其もうちの
社のひいもあら。御物川井のとありて、柳田村
をすまやかに多くのひづれまで。草彌ハサウエイ、
名もうなづけり。御物川井のとありて、柳田村
をすまやかに多くのひづれまで。草彌ハサウエイ
ある。御手名ミタナにて、雪清シキのあらわすと、ねどこも。

ひそきをあそび、すまきうち、かくしてあつれくとゆ
むけてけ。おもろせんああ、あやせ、ああも
のりつて、雪垣とすのすも、わからうとぬる
やさかう。かほりくゆりて、おもんがむわいあ
もおき、さかく日敵雪ともゆりはりて、おもか
むけりやかく、ゆきも拂しきし。雪のよだらうかよ
黒ねずみ、うねとすのと、おもねく、昇るのよ
えねうだらう。御夕ミタナみかれま、三の往もあもうけま、
ゆきもくも絆て、ゆみ野じく通す中後ハタハタも
迎ゆく。人ヒトも、雪袴シロツバ、ひきをすきもゆくもすき
着て、蓑帽アマハット、防頭巾ブセ。又馬のとづけもひきもすき
あがく。かく、かくと、第三多羅ミタナをゆる。御と、おと

アリテシキタモ、モニシテアリ。消魂とおもふやうに思ひよ。ソも
多うがりのいじそあくめとみと、どうぞ男もや
く浦ノ内、又は、おとむけたるをやつともやまひとみの
まくともと、ゆうと、鐵馬としんす、まくまく。
あれかやうと、雪が落ちるもすまゆ。奈良磯の
ゆき落しきと、やのねうそ、北風が子供が歌をか
きこゆて、雪も飛舞とやうに傳しむ。ゆかの邊に
迎えうへ、ゆかがめづれどくと、もととど。
うれの日も、今やうめで、今あれ、きめで、うも
うれぬまゝ、例のとくづかずするもやあきらめ
うきそ、雪が、うちやうううううう、はうが、瓦
をはわう、瓦のわしうれかよとおもひ

もや煙草ぬる時も、己の心はもううきよとてしめ、或
迎え里むるやうやうりやうやうに、身をもつてしめ、田川
むらの白波のうらあらやうしゆきはわる、そ
のうらあらやうすすみ田川を、畠はづかとよふ
すじうんせんせんらに整はれて、村のまえと並わる
名のくましきうち、甚うすう、甚うしあるの
やうとせあひんと、軍事うけすう、係せたまは
ゆゑある、路ひ合て、ちうくがれば、兵士ちせう、ちう
の移行折れ、それとゆわゆの、縫りとつて、す
もなるにりとゆき、かほじまくら、半世季を
ゆきのちゆきと、雪のつて、そば雪吹ふと
毎ゆきと、其のれも、神宮寺

の間をそそぎてこらすし、あせりうきの
 あいゆかあくぬ雪ゆせむきもひりき
 雪ゆのゆす、びりきゆえもいしき
 もつたかと、雪車あまこひくまくらと
 みゆやまひかまゆ、雪ゆくらうきりぬ
 き、雪ゆのゆくはくはくとよつしまくで、
 ひれりありゆをやう、幼いわにじる
 あら山のひくらはくわくのゆが
 おうやひ五七うりふくやうれえめで
 きものくすのぬ、もうかひくらうきの眼
 あくねあく、五七ゆかほ湯澤
ソラヌイ山の群山ゆづるの山にけり、雪、五七年
 ぬまゆかほ三万重の山にけり、雪、五七年

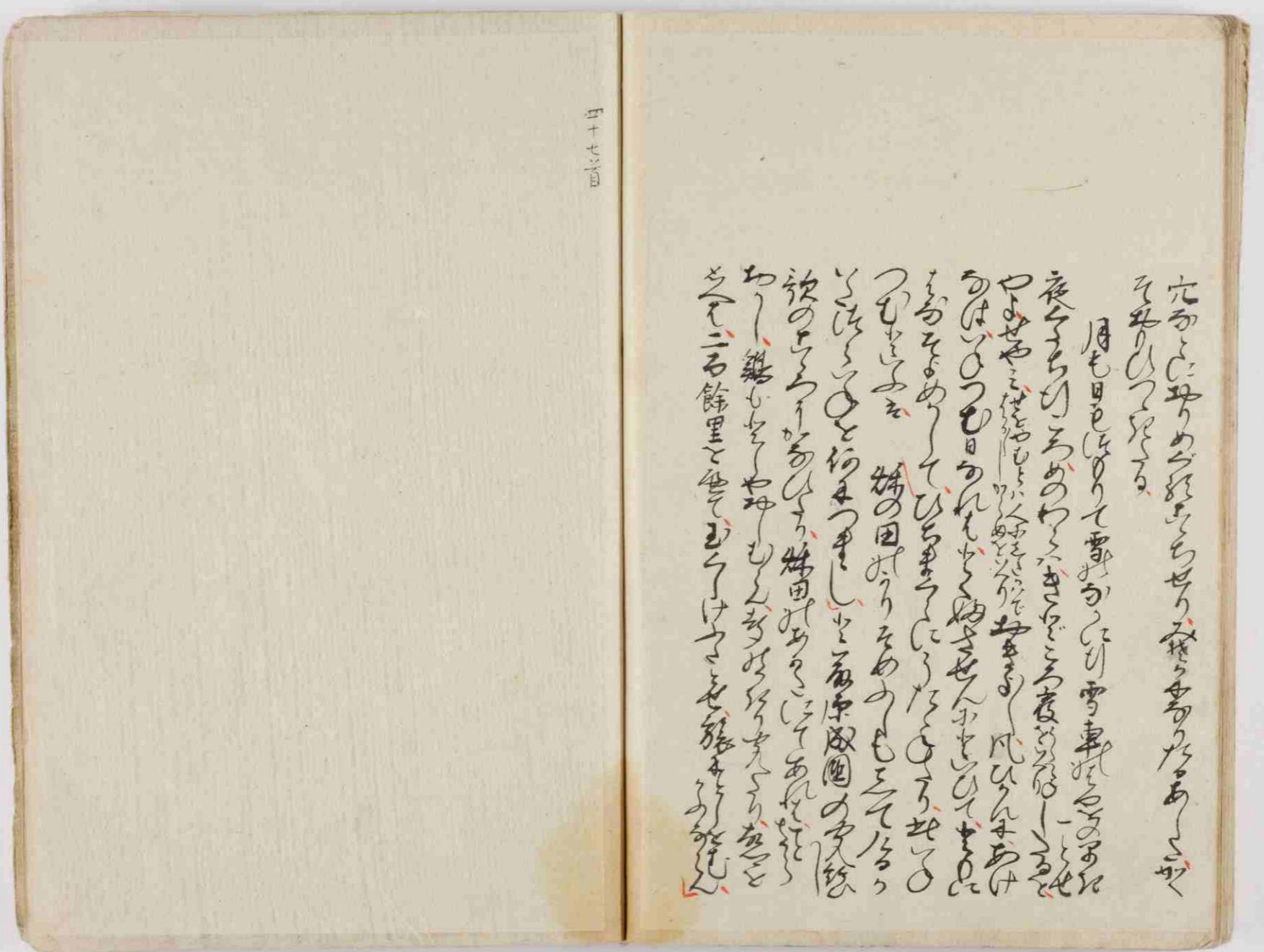
まろせゆ、山谷かとおもひと者、ちゆく五
 ちゆく雪、上よ小侍、五、まろて、じゆくを、ゆく
 の二尺半か、つゆくわゆ、生、くまけて、おひく
 上、くまくびく、うりて、あまく、五、狗りく、か
 じくと、くる大子、あじ荒が、かくとも、其
 大子、みの、山、まくと、かくとも、さく、あう大子、
 ぬまゆかほ、小どりしう、せらるるを、
 いたも、かかれ、あまく、西、ゆく、れぞり、近
 犬のあまじま、うこと、く、ひる、じゆく、まく、
 ちゆく、ゆく、ひく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、
 あ、日、れ、て、ある、當、に、名、れ、ば、や、あ、名、れ、行、來
 あ、と、お、わ、ゆ、て、お、ほ、く、ま、と、こ、し、そ、よ、み

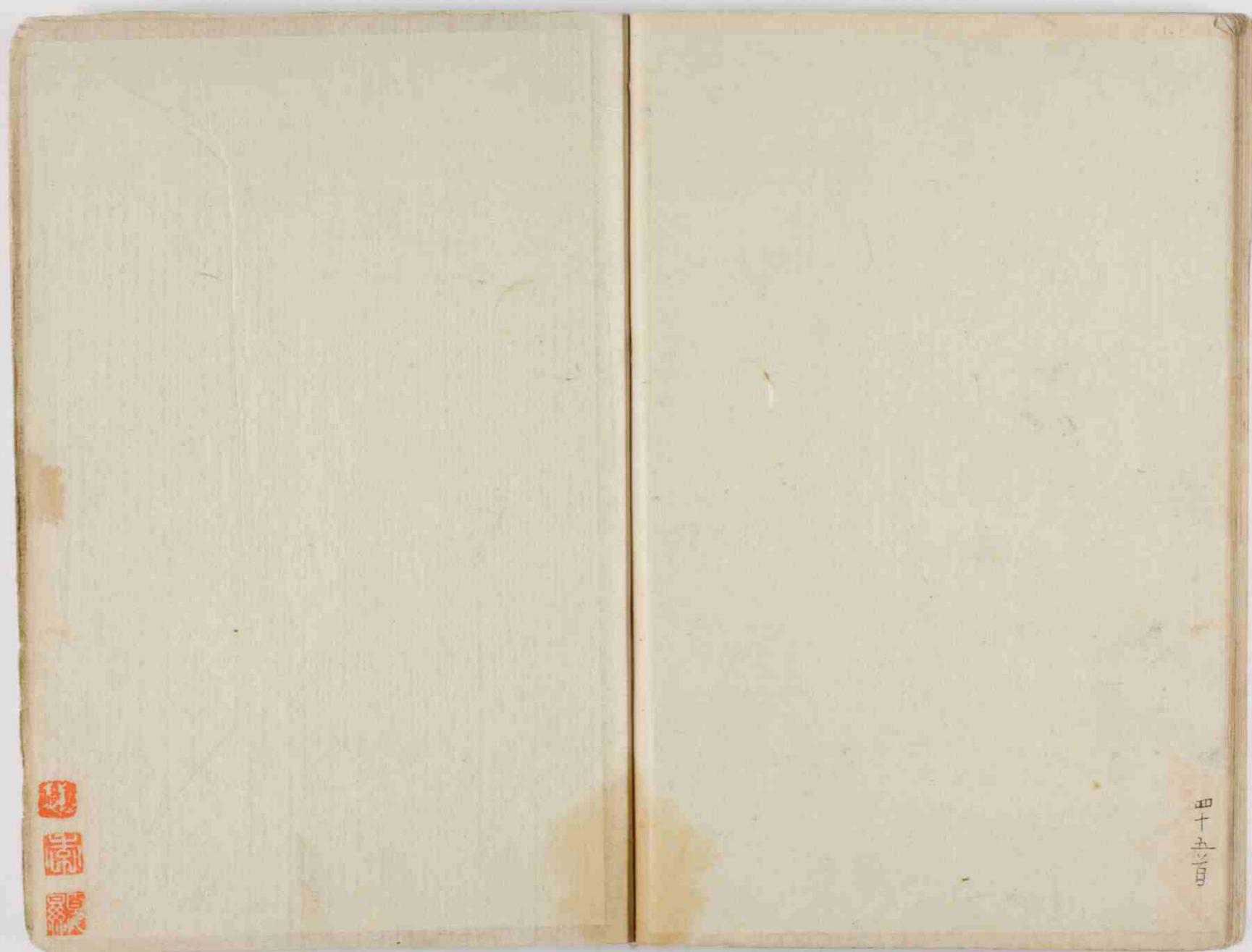
才も六寸をこえて、とあると縛まつ
馬の手にとすとあじて、かたはさ。
まよひあひる、茶燈の護麻子^{カモコ}がれうる
ゆゑとぞして、せうはくおしまやうら
くらめしてゆるあくまがくくわくとみみ
まよひくまれゆくあれ、うぬまちよゆ
まよひくわくそりひあすらまくわ
まよひくわくそりひあすらまくわ
えむけり方々するひよりよう雪車りくる
まよひくわくそりひあすらまくわ
そりはあを一筋とくれまく
か葉薄うかうみの保田里^{ホタリ}かくふ齋

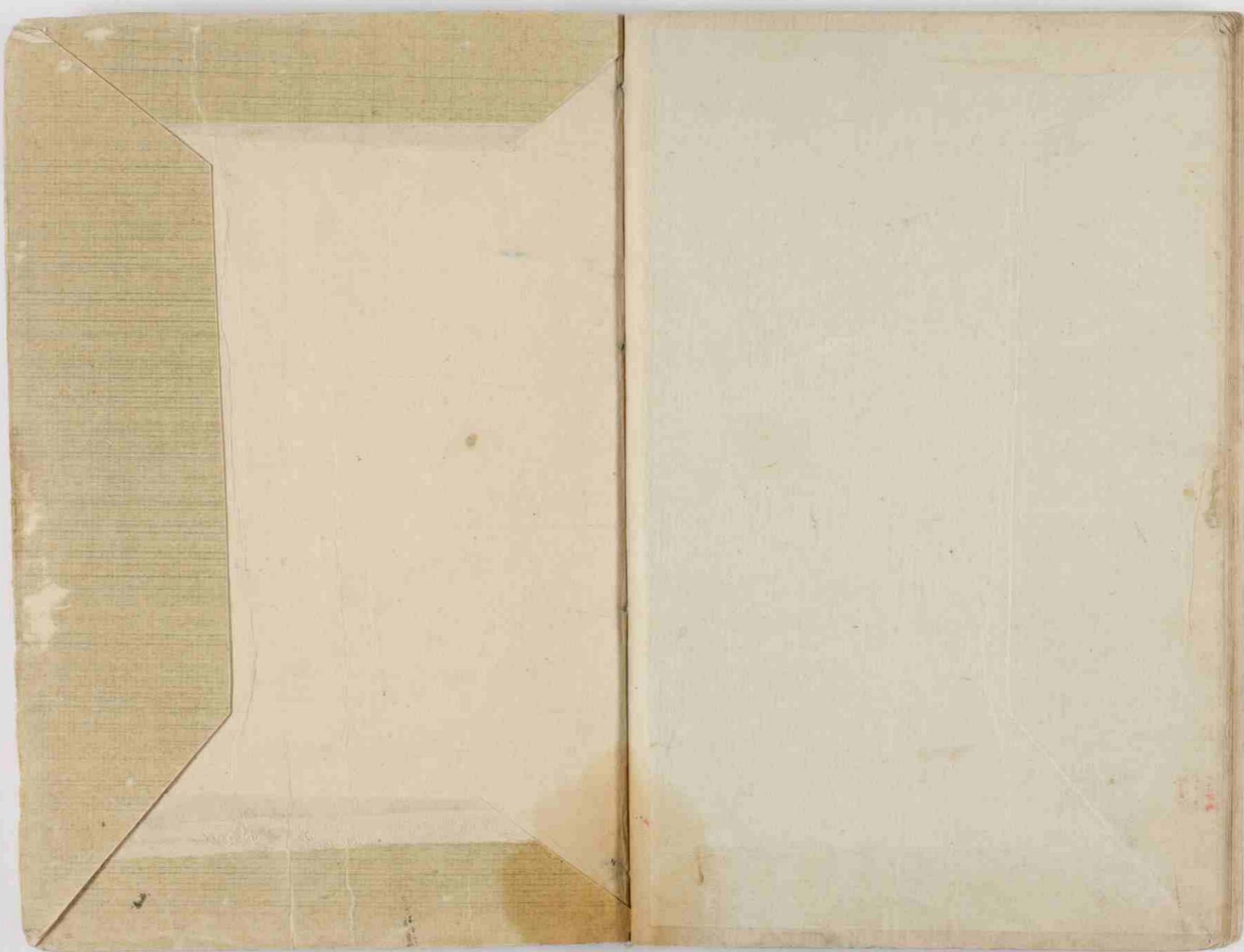
廿日雪もう卷廻りて、あちこちもくじらとて、山並み
雪は半キリをこなして、もと新しく、散つたりま
キもひかん、大雪やまともに、見る人の面、
あらわし、高草と、新ひきと、むとうりよのなか
うのまどりうち、わく、ゆきあそびと、やう
きうは雪と、ごちたかと、とめりそ、中には筆の
さめたりして、あらぬまほりうて、ゑぬ、雪の囁き
せうき、うねるを、うきを、語りて、相もうち山壁
がくもうち山壁、里とて、おとぎ、おとぎ、おと
ぎも、ゆづる、ゆづる、あらぬれ、雄立、五季うと
高雪おとぎ、おとぎ、おとぎ、おとぎ、おとぎ、おと
ぎのうぬれよ、あらひうけて、おとぎで、おと

才も六十才をたどりて、とある才の縁より
馬の手代としてすとあじ門を出でる事へば、
まことにあひる、茶燈の護麻子がれうる
かでござりて、此はほんとおしらやうとも
もがしてゆる事であるが、ちくにれど、あ
ま遠く、それ追ふあれど、うぬをもよぬ
きもひづり、かくしてりひめすらすまゆ、
あまに雪が山路やひとゆ里や多ひる
みびてり方だす。ひよりもう雪車りする
うくすらじてあり氣、ナリモうりのま
せりれあと一筋足とれまう
ひ草薙をさうぬ之保田里をゆかて三晩

廿日雪もう卷廻りて、あちこちも雪ふとを、山並み
雪は半キリをこなして、もと新しく、散つたりま
キをひかん、大雪やまともに、見る人の面、
あらわし、高草と、新ひきと、むとうじよの力わく
うのミ尺より、わく、ゆきあそびと、やう
きうは雪と、ごうちあらえと、ゆうそ中に筆の
さめたりして、あらぬまほううて、重ぬ、雪の囁き
せうき、うねる音を、さへもうして、相もうち山壁
がくとも、かね、里と、ひがみ、年と、まくは
いも、ゆづる、まう、まうかねれ、雄立、五年うと
高雪おひらき、かくして、ゆき、うつた、の景、
ゆきのうの霜よ、あらうて、まようて、ゆ







虫食いあり

42/42

